食事介助

◆食事介助の目的

私たちは生きていくために、栄養をとることをしなくてはいけません。 その人に合った食事形態で召し上がることで口内・腸などの機能保持と健康を保つための土台をつくり、 病気を予防したり、病気から回復する力をつけることにもなります。 食べることは、大きな楽しみだと思います。気を配りながら介助してください。

- ・体に必要な栄養や水分を補給します。
- ・残存機能をフルに使うことで、活性や自立への意欲がでます。
- ・嚥下状態、食事量からその人の身体の状態がわかります。
- 食事を楽しむことで、表情が明るくなります。

1. 利用者の状態把 ○氏名・年齢

○主な疾病と障害・疾病の状態を知る

・障害の部位・程度を把握する ・視野狭窄の有無痴呆状態を知る

○起居・移動・体位 ・起居・移動・摂食・体位可能範囲を知る

・誤嚥しない体位を理解し、利用者に合った体位をとる

○必要物品 ・自助具・エプロン・おしぼり・お茶を準備する

○配膳・セッティング ・介助の前に手を洗う

・視覚障害のある利用者には、食器の位置を確認する

3 食事をする環境づくり ○環境・楽しい雰囲気をつくる

○対応・献立を説明し、食欲を促す声掛けを行う

○介助者 ・介助者のエプロンは常に清潔にし、専用のものを使用する

4 接食の介助 ○個々に合った介助 ・覚醒を確認する

・食事の温度を確認する

・嚥下を確認しながら、個々に合ったペースで介助を行う

・主食・副食は別々にし、混ぜない

・自力摂取の方も、必要に応じて介助を行う

・水分も一緒にとる

・おしぼりで口周り、手指の汚れを拭き取る

○臥床状態での摂食介・ベッドを30~60度起こし、頭部を前屈し、あごを

引いた姿勢にする

○片麻痺の方の食事介 別紙・・・片麻痺食事介助 参照

□ 全介助の方の食事介 <mark>別紙・・・全介助食事介助 参照</mark>

○服薬の確認 <服薬介助マニュアル参照>

5 食事の後片付け ○摂取量の観察・食事量を観察し、記録する

○下膳・食べ終わったかの声掛けを・確認をし、片づけを始める

・持参の自助具(食器も含む)は、すぐ洗い鞄に直す。 ・衣服・車椅子に食べこぼしがないか確認する

・テーブル・床に食べこぼしがないか確認する

7 食後の排泄介助 ○排泄介助 <排泄介助マニュアル参照>

*食事中の異変への対応

むせ・誤嚥・窒息・誤嚥のある利用者を把握する

- ・むせや誤嚥が起きたら、口腔内の食物を書き出し、背部をタッピングする
- ・看護士に知らせ、協力して対処する
- ・必要に応じて吸引器を使用する

起因疾患別留意事項

○脳性麻痺 ・食べこぼしが多いときは、エプロンを使用する

めん類などは短く切り、あまり固まりにしない

・スプーン・らく飲みなど、食べやすいものを使用する

・不随意運動がある場合は、口を開けてくれるタイミングをつかみ、合わせる

○脳血管障害 ・ソース・醤油などのかけすぎ、塩分のとりすぎに注意する

・麻痺のない口の端から少しずつ入れ、嚥下を確認して次の食物を入れる ・寝たきりの介助のときは、麻痺側を上にして横向け、上体を高く上げる

○視覚障害 ・食べやすい位置に何を置いてあるか、メニューを説明する

・実際に手で食器・食物を触って、確認してもらう

・食べ残してあるものがあれば、本人に伝え、いるかどうか確認する

○進行性筋萎縮症・筋力がないので、利用者の体の位置にあったセッティングをし、本人に負担を

かけない

○リウマチ・体調の変動が激しく、周期的に悪くなることが多いので、体調に合わせた介助を行う

・本人に合った食器・自助具を工夫し、残存機能を生かして食べる

○頭部外傷後遺症・気分や感情の変動が激しい場合は、本人の状態に合わせて介助を行う

・無理強いや急に行うなどの行為は絶対にやめ、声掛けや説明をし、納得してもらって

から介助を行う

・興奮したりする原因となるものは、あらかじめ排除し、改善しておく

○嚥下困難な方・状態に合わせて、刻み食・ミンチ食・ミキサー食・流動食に替え、対応する

・喘鳴・咳き込み・嘔気・チアノーゼ・急にむせたりした場合には、誤嚥の可能性が

ある